

# VART 2016

4月号 (発行回数、発行月とも不定期)

01

創刊号  
(β版)

編集・発行:クイスト株式会社

FREE

長野県上田市でワイン葡萄を栽培しながらアートを制作しているクイスト株式会社のマイコミ誌。  
葡萄畑の様子や生育状況、油彩を中心としたアート作品、そして田舎暮らしや地元ネタなど、  
写真、アート、エッセイなどを織り交ぜながら、ゆるゆると発信していきます。

※VARTは、フランス語でワイン=VinのイニシャルVと、芸術=Artを組み合わせた表現です。  
※マイコミ誌とは、マイクロ・コミュニティ・ペーパーを略した造語です。  
※クイスト株式会社は、画家・長谷川真次がひとり運営しているデザイン会社です。



## 今号の1枚。

真田ワイナリーのメルロー (2015年7月撮影)

## 2016年は開墾してから初めての収穫。 記念となるヴィンテージ・イヤーです。

2014年に植えた葡萄の苗(赤ワインのメルロー)も順調に育ち続け、今年の秋には「初めての」収穫を迎えられる予定です。

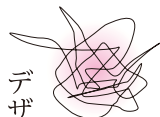
葡萄の樹は1年周期で生育と休眠を繰り返して徐々に立派な樹に育つ植物。1年のうちの生育期を終える秋には、その年の養分を貯蔵するため徐々に休眠を始めて、やがてすべての葉を落とし、地上近くの幹や土中の根に養分を蓄え、厳しい冬を乗り越えます。そして、春が近づき地温が上がり始めると養分は樹液となって流動し、新しい根を形成して代謝が活発に。新しい成長サイクルの始まりです。

3月は、代謝により生成された養分が樹全体に供給される季節。その証が「養水」です。この時季になると、休眠期に剪定しておいた樹の切り口から溢れるように養水が出てきます。感動しますよ。ワクワクします。今秋に収穫する葡萄は長野県内のワイナリーに委託醸造し、来年の春頃には念願の初ヴィンテージが誕生します。一般に、ワインの味は原料葡萄のデキによって80%以上決まると言われています。つまり、栽培管理がいかに重要かということ。少しずつ、緊張してきました。



剪定した枝の切口から水が上がり始める。(2016年3月21日撮影)





## めぐりめぐって、 画家という生き方を選択してみたら...

デザイン業で突っ走っているうちに、いつしか忘れていた描くこと。それなのに、夢ってちよつとしたきっかけで叶うようです。

門学校も出ていない私に実力も素養も縁も無いのは当たり前。分厚い壁にはじかれ続け、ずっと現実の中で苦闘し続けていました。

私が社会に出る頃の1980年代、広告業界はそれは華やかでした。田中一光や松永真のデザイン、畑貴志や糸井重里のコピー、山口はるみや瀧野晴夫のイラスト。

人生の後半戦。ワイン葡萄栽培のために移住したら都会の垢が洗い流されたようで、気づいたら再び絵を描き始め、のめり込み、ついには個展を開催することに。

そんな世界に憧れイラストレーターを目指したものの、美大も専

1枚描くたびに心がさっぱりしてゆく感触は快感ですらありました。信州に移住して3年。思いも寄らない展開ながら、絵を描くことが自分の人生に欠かせない行為であることを確信する毎日です。

ゆく感触は快感ですらありました。信州に移住して3年。思いも寄らない展開ながら、絵を描くことが自分の人生に欠かせない行為であることを確信する毎日です。



自宅二階を改装した私設ギャラリー



銀座で初の個展  
2015年11月



「ヴェレーゾン」油彩

### ■略歴■

長谷川真次(はせがわ しんじ)  
1957年、神奈川県藤沢市生まれ。  
クイスト株式会社 代表取締役  
グラフィックデザイナー、画家、ワイン葡萄栽培農家  
1980年代、東京でデザイナーとして勤務しながらイラストレーターを目指すも挫折を繰り返す。1988年、31歳で退職しフリーランスのグラフィックデザイナーとして独立。  
1991年、有限会社長谷川デザイン事務所を設立し2003年にクイスト株式会社へと改組。現在に至る。  
2011年、東日本大震災を機にワイン用ぶどうの栽培を決意。2013年に長野県上田市に移住し、2014年には真田町で畑を開墾して栽培をスタート。この時期に画家・宗田光一氏と出会い、本格的に油彩画を始め、2015年秋に東京・銀座で初の個展を開催。  
現在、画家として活動しながら、デザイン業・ワイン用ぶどう栽培を行っている。



アトリエ



## 予想を超えた居心地の良さ。 「天空の村」で得た、心の豊かさ。

2011年の東日本大震災後に「自分の残りの時間」を意識し始めると、それまでの迷いが無くなり、農業について様々リサーチ。そして浅間山麓の丘陵地がワイン葡萄栽培の適地であること、新しいワイナリーが誕生したばかりであることを知り、すぐに移住を決意しました。

夢科が見渡せるパノラマ状態で、眼下には千曲川流域が横たわる絶景三昧。周囲には良質の温泉が多く、美味も豊富。クルマさえあれば何ひとつ不便さは感じません。私が勝手に「天空の村」と呼んでいるこの集落。冬はとびきり寒いし全く無名ながら、徐々に首都圏からの移住者も増えつつあります。希少な魅力を感じて。

東京から新幹線で1時間ちよつとの上田市とはいえ、私の住む地域は市中から見上げる山間にポツンと存在する半ば過疎集落。

間違い無く、豊かさを得られます、心の。居心地良いです。



家の前にはこんな夕景が。(2015年7月撮影)



地元の宝。日本の棚田百選「稲倉の棚田」(2015年5月撮影)



少しずつ移住者仲間も増えてきました。佐藤さんご夫婦と。(2016年3月撮影)



集落で唯一の店舗。「カフェあんこ坂」(2016年3月撮影)

